大会会長講演

◆認知症かな？と思ったときに思い出してほしい話

関西医療大学学長・和歌山県立医科大学名誉教授　伊東　秀文

【key words】認知症、診断、治療可能な認知症、アルツハイマー型認知症

【Abstract】

わが国では人口高齢化の進展に伴い、認知症と診断される方が増加しています。65歳以上の高齢者3603万人のうち、認知症の人は443万人（12.3％）、認知症の前段階と考えられる軽度認知障害（MCI）の人は559万人（15.5）％とされ、合わせて1000万人を超えます。すなわち、高齢者の3-4人に1人が認知機能にかかわる症状があることになります。また、認知症は高齢者のみの病気ではなく、65歳未満で発症する若年性認知症もありますので、すべての成人にとって無関係ではありません。先生方が診ておられるたくさんの患者さんの中にも恐らく何人かはおられるでしょうし、身近なご家族や、ひょっとしたら先生ご自身にも、気になる症状が出ているかもしれません。そして厄介なことに、認知症は骨折や脳梗塞のように突然発症するわけではなく、いつの間にかじわじわと症状が出てくるものですから、なかなか発見が難しいという面があります。認知症というのは一つの病名ではなく症候群であり、症状名です。認知症を起こす疾患はさまざまですが、服用中のお薬が原因の場合や、脳梗塞や内臓の病気によるもの、ホルモン異常やビタミン欠乏によるものなど、予防や治療が可能なものがあります。これらの「治療可能な認知症」を見逃さないことが非常に重要です。一方、脳神経細胞そのものが変性する「変性性認知症」は、いまだに完全な予防や治療は困難です。アルツハイマー型認知症やレヴィ小体型認知症が代表疾患ですが、これらの変性性認知症も、最近は進行を遅らせるお薬が開発されつつあります。ただ、病気が進行してしまってからでは効果が乏しいため、できるだけ早期の診断が重要です。認知症かなと思ったら、まずは怖がらずに病院を受診して、できるだけ早く正しい診断と治療を受けましょう。